アメリカ文化の専門家・本城誠一氏がナビゲート

# アメリカン・ゴールデンエイジの名作・名盤であの頃へ　タイムスリップ

監督／フランシス・F・コッポラ
出演／マーロン・ブランド、アル・パチーノ

### ゴッドファーザー　1972年
**マフィアのファミリー（組織と家族）の内側を描く**

**イタリア系移民が新天地アメリカに作ったマフィアの組織。そのファミリーの内部の家族と外部の組織が共に成長し、そして崩壊していく。**

当時タブーであったマフィアの内幕を描いたベスト・セラーを新人監督のコッポラが映画化。ファミリーとは家族でもあり、それと半ば一体化した犯罪組織の両方を意味する。そこでは、一家を裏切った義理の弟を絞殺するといったマフィアの掟と家族の愛憎が、複雑に物語を織りなしている。

監督／デニス・ホッパー
出演／ピーター・フォンダ、デニス・ホッパー

### イージーライダー　1969年
**自由を求めて改造バイクでアメリカを探す旅に出る**

**メキシコからの麻薬の密輸で資金を得たキャプテン・アメリカとビリーは、ニューオリンズのマルディ・グラ（謝肉祭）を目指して、バイクで旅に出る。**

若手俳優たちが資金を貯めて、従来のハリウッドの映画作りとは全く異なる方法でこの映画を撮った。それはアンチ・ヒーロー、断片的なスートリー展開、そしてハレーションも気にしない映像など。またステッペン・ウルフのロックを使ったこの映画は当時より今見直して面白いと思う。

監督／マイク・ニコルズ
出演／ダスティン・ホフマン、キャサリン・ロス

### 卒業　1967年
**S&Gの主題歌にのせて描かれる青春の挫折と冒険**

**大学は卒業したけれど目的のないベンは一家の友人である年上の女性と不倫をする。しかし両親は彼女の娘と付き合う事を勧める。**

ベンの自宅のプールからホテルへのジャンプ・カットなど、舞台出身のマイク・ニコルズ監督による斬新な映画技法が埋め込まれている。サイモン&ガーファンクルの主題歌「サウンド・オブ・サイレンス」の都会の孤独を伝えるメッセージや別れのシーンでの「スカボロ・フェア」がいい。

監督／ロバート・ワイズ、ジェローム・ロビンス
出演／ナタリー・ウッド、リチャード・ベイマー

### ウエスト・サイド物語　1961年
**「ロミオとジュリエット」の悲劇を現代に置き換えた傑作**

**ニューヨークの下町ウエス・トサイドに対立するイタリア系移民の不良集団と新移民のプエルトリコ系移民の不良集団。しかも両グループの男女が恋に陥る。**

シェークスピアの悲劇を下敷きとして、1960年代のニューヨークに舞台を移したミュージカルを映画化した。旧移民（イタリア系）と新移民（プエルトリコ系）の対立と、故郷を誇りに思うプエルトリコ系の男たちと新天地アメリカを受け入れる女たちの対立も描かれる。

監督／ウディ・アレン
出演／ダイアン・キートン、ウディ・アレン

### アニー・ホール　1978年
**「これぞアレンの最高傑作」とチャップリンも称賛**

**40代のユダヤ系コメディアンのアルビー・シンガーと奔放な女性アニー・ホールとの出会いと別れを様々な映画的手法を駆使して描く。**

コメディとシリアスものを交互に作るアレンの、その双方のメリットを生かした作品。神経質で常に死を思うシンガーと、屈託のないアニー・ホールのコントラストが興味深い。またひたすら話し続ける主人公に、コミュニケーションへの渇望と孤独を感じる。

監督／ジョージ・ルーカス
出演／リチャード・ドレイファス、ロン・ハワード

### アメリカン・グラフィティ　1973年
**卒業を翌日に控えた若者の恋と車とロックン・ロール**

**アメリカ地方都市に生きる若者たちが、ガール・ハントのために調達した車であてもなく町をドライブし、カー・ラジオから流れるロックン・ロールに酔いしれる。**

あえてベトナム戦争前に時代設定をした事で緩やかな戦争批判となる。車から携帯へと若者の必須アイテムも時代によって変わりつつあるのだろうか。しかし無為を生きる若者の時間の真の意味が、大人になって初めて分かるというのは、時代を超えての定理のような気がする。

監督／ピーター・イェーツ
出演／スティーブ・マックイーン、ジャクリーン・ビセット

### ブリット　1968年
**殺人犯を追ってサンフランシスコの坂道を疾走する**

**刑事ブリットは政治家から証言のために犯罪者を保護する任務を与えられるが、その証人を殺され、背後に陰謀が隠されている事を知る。**

敏捷な身のこなしでは定評のあるマックイーンの刑事もの。クールなブリット刑事が陰険な政治家をものともせず、ひたすら犯人を追い、サンフランシスコの坂道でカー・チェースをして、追い詰めた犯人を空港でやむを得ず射殺する。その獲物を追う動物のような動きが素晴らしい。

監督／アーサー・ペン
出演／ウォーレン・ベイティー、フェイ・ダナウェイ

### 俺たちに明日はない　1967年
**実在の銀行強盗を描く最初のアメリカン・ニューシネマ**

**大恐慌時代にアメリカ各地の銀行を荒らしまわったカップルの銀行強盗の出会いと逃避行と悲惨な最期が新しいタッチで描かれる。**

ボニー（女主人公）が外にいるクライドに会うために階段を下りてくるアップのショットから、これまでとは違う映画の予感がする。テレビの演出家出身のアーサー・ペンのスピーディーな映像。製作者も兼ねる主演のビーティーがヌーベル・バーグの影響を受けたアメリカン・ニューシネマの嚆矢。

O.tone LOVE AMERICA!

ちょっと真面目に考察する

# アメリカン・ポップカルチャーの変遷

**様々なポップカルチャーが生まれた50～70年代のアメリカ。その背後にあるものを意識すればさらに深く楽しめるはず。**

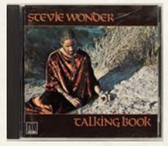
北海学園大学人文学部 英米文化学科教授
**本城誠二**さん
1952年生まれ、札幌市出身。ライフワークは「ポストモダン文化のまとめ」。酒を片手に好きな音楽を聴くのが至福の時間。

**――1950年～70年代、その時代10年ごとのアメリカン・ポップカルチャーの特徴を教えてください。**

50年代とは、アメリカが第2次大戦後の繁栄を謳歌した時代。「パパは何でも知っている」「うちのママは世界一」といった典型的な白人中流家庭が舞台のドラマが流行しました。公民権運動の影響で人種の壁が崩れ始めたこの時期、黒人のように歌えるプレスリー、白人にも受け入れられるサム・クックが登場。ロックン・ロールの原点とも言うべき「ロック・アラウンド・ザ・クロック」が生まれたのもこの頃で、初めて若者の文化ができたと言えるでしょう。次の10年はカウンターカルチャーの時代。男性と女性、白人と黒人、大人と若者のような二つの異なる概念が対立することで、価値観の大転換が起こりました。60年代後半「アメリカン・ニューシネマ」の時代には、それまでの明るく正しい主人公ではなく、ハッピーエンドを否定する作品も多く作られました。70年代は裕福さのほころびが出始め、ヒッピー文化が花開いた時代。「内向の時代」とも言われるこの時期は、社会ではなく友達、恋人、自分自身などごく小さな範囲を扱う「ミニマリズム」が特徴です。キャロル・キングをはじめとする女性シンガーソングライターも登場しました。

**――この時代のポップカルチャーはなぜ今もオトン世代を引きつけるのでしょう。**

戦後の日本にアメリカの文化が大量に入り、「正しいもの」として刷り込まれたのは否めません。しかし基本的にポップなアメリカ文化は、明るく多様性があって分かりやすく、人々に浸透する力があったのも事実。ロックを例に出せば演劇的で少し高尚な印象のあるイギリスのものと比べて、アメリカのは単純明快（もちろん概には言えませんが）。多感な時期にそれらに強烈な洗礼を受けた人にとっては、アメリカのポップカルチャーこそがカッコよさの原点となっているのかもしれません。



1972年

### Talking Book
アーティスト／Stevie Wonder
**リトル・スティービーが新しいポップとソウルの担い手として登場**

盲目の黒人少年はリトル・スティービーとして音楽界にデビューしていたが、「驚異」（Wonder）のスティービーとして、クラビネットを駆使する「迷信」を含む『トーキング・ブック』でニュー・ソウルの旗手となる。スティービーはすべての楽器を弾きこなせ、かつその節回しが天才的。

1972年

### In Concert
アーティスト／Janis Joplin
**60'sロック・シーンを代表する女性シンガーの、時代を駆け抜けた生き方を象徴**

ビートニクに憧れてテキサスの田舎からヒッピー文化のメッカ・サンフランシスコに出てきたジャニスは、音楽と愛に生き、そしてドラッグで夭逝した。彼女の「サマータイム」を聞くと、他の曲における高音のシャウトとは異なり、荒ぶる魂を鎮めるような唯一無二の歌唱に揺さぶられる。

1968年

### Music from Big Pink
アーティスト／Band
**ディランのバック・バンドのグループがアメリカを代表するザ・バンドに**

ザ・バンドのデビュー・アルバムはニューヨーク州北部にあるメンバーの家「ビッグ・ピンク」で作られた。バンドの持ち味は、ブルースをベースに、ジャズ、フォーク、地方のサウンドのごった煮？でもある。そんなダウン・ツー・アースな土臭い音づくりが心地よい。

1964～66年

### Sound of Silence
アーティスト／Simon &Garfunkel
**「沈黙の音」と都会の孤独を歌うフォーク・デュオのヒット作。**

フォーク的に作った「サウンド・オブ・サイレンス」をプロデューサーが勝手にエレキ・ギターを加えたテイクを売り出しヒットしてしまった。この幼馴染のユダヤ系青年の二人組は、アート・ガーファンケルの美しい高音と、ポール・サイモンの巧みなギターそして深みのある歌詞で一時代を画した。

1976年

### Hotel California
アーティスト／Eagles
**カリフォルニアの影と60年代の真の終わりとアメリカの退廃を歌う**

歌姫リンダ・ロンシュタットのバック・バンドとしてスタートしたイーグルスは、2作目の『ならず者』ではカントリー・ロックを目指していた。しかし5作目の『ホテル・カリフォルニア』は、アメリカ建国200年の節目に、アメリカの退廃を批判するコンセプト・アルバムとなった。

1972年

### Superfly
アーティスト／Curtis Mayfield
**黒人のプライドと怒りを歌うソウル・ミュージックの芸術家**

インプレッションズから独立し、公民権運動の中で黒人のプライドを音楽で表現する。ゴスペル的な歌詞をワウワウ・ギターと、ファルセットで歌い上げる。ゲットーをリアルに描いた映画『スーパーフライ』のサウンド・トラックが大ヒット。

1970年

### Abraxas
アーティスト／Santana
**メキシコ系アメリカ人、サンタナのラテン・フレーバーあふれるダンサブルなロック**

ロックの歴史には黒人と白人が登場するがヒスパニック系は出てこない。しかし後のロス・ロボスなどのように南米に近い西海岸にはラテン・ロックが、初期のリッチー・バランスの頃からあった。その第一人者サンタナのチョーキングを多用したギターが泣かせる。

1965年

### Highway 61 Revisited
アーティスト／Bob Dylan
**フォークのプリンスがギターにプラグ・インしてロックのスターに**

モダン・フォークの若き旗手ボブ・ディランがエレキ・ギターに持ちかえて、ニューポート・フォーク・フェスティバルに登場しブーイングを受けるが、同時にロックのスターとなる。収録曲の「ライク・ア・ローリング・ストーン」は支配層への痛烈な皮肉がシンプルで深い言葉で語られる。